

時代小説と江戸・深川⑤

深川を描いた作家たち

江東区深川江戸資料館

時代小説は主に江戸時代、そして江戸の町やそこに暮らす人々を描いています。江戸庶民を描いた市井物では他国から身寄りもなく江戸に集まる孤独な人々が、支えあいながら結びついていく江戸の町ならではの様々な人間模様が展開します。特に深川には、江戸を支える新開地として発展した木場や倉庫業、狛師町などで働く多くの職人や商人が暮らし、掘割が町中を縦横に流れる「水の町」の景観、岡場所の女性などから深川独特の情緒を作家たちは感じ、深川を舞台にしました。今回は現在まで多くの人々に親しまれ、読み継がれている、深川を舞台に時代小説を描いた代表的な作家とその作品を見ていきます。

1. 山本周五郎

～底辺に生きる江戸庶民を描く～

(1) 読者のための作品を生み出す

山梨県北都留郡初狩村生まれの山本周五郎《明治 36 年 (1903) ～昭和 42 年 (1967)》は、小学校卒業後に 13 歳で住み込んだ、終生の恩人となる木挽町の質店・山本周五郎商店の主人から見いだされ、文学の道に進みます。昭和 3 年 (1928) 25 歳の時、千葉県浦安の風景に惹かれ移り住み、東京の雑誌社へ浦安・行徳と深川高橋を結んでいた定期蒸気船で通いました。

昭和 18 年 (1943) 周五郎の『日本婦道記』が第 17 回直木賞候補作に選ばれると、即座に周五郎は受



『剣客商売』「悪い虫」挿絵 中一弥画
画像提供 池波正太郎記念文庫

賞を辞退します。生涯、賞のためではなく、読者のための小説を書き続けました。

(2) 周五郎の「下町もの」

周五郎は自ら作品を「武家もの」「下町もの」「岡場所もの」などと分類し、「下町もの」「岡場所もの」の舞台に深川を描いています。「下町もの」の特色は「夫婦」、また血縁ではなく「江戸」の町で共に暮らすことで結びついた庶民、さらに人々を見つめる「水の風景」などを挙げるすることができます。

『深川安楽亭』は木場の貯木場の先の掘割近くにあり、深川のはずれの吉永町 (現・平野) にある居酒屋・深川安楽亭に集まる無頼者たちと謎の客の姿から、孤独な人々の生き様を静かに描いています。また『つゆのひぬま』では深川の岡場所・佃の娼家「蔦家」の遊女おひろ、おぶんを中心に「露の干ぬまの朝顔」を象徴にし、底辺に生きる人々が真実の愛を見つける姿を描きました。

2. 池波正太郎

～江戸の原風景を描く～

(1) 池波正太郎と深川

池波正太郎《大正 12 年 (1923) ～平成 2 年 (1990)》は「私は、江戸を見たわけではない (随筆『男のリズム』) と言います。浅草生まれの正太郎は、江戸の名残をとどめる戦前の下町に暮らし、その風景やそこに暮らす職人や商人の生き様を「江戸の原風景」として時代小説に描きました。新国劇の作家となり、長谷川伸に師事し、歴史の影に隠れた人々を主に取り上げました。

『江戸切絵図散歩』の中で正太郎は子どもの頃に門前仲町と砂町に親戚がおり、お使いで訪れていたことを書いています。また深川の印象を「深川の町は、夕暮れが良かった。川や舟の佇まいが変化を見せ、盛り場や洲崎の遊郭の灯火さえも、銀座や浅草のそれとはちがって、東京湾の汐の香が、尚更に想いを深めた。」と記しています。さらに食通であった正太郎は『深川の二店』で、森下の桜鍋「みの家」や、

高橋にあったどぜう屋「伊せ喜」についても思い出と共に触れています。

(2) 正太郎が描く深川

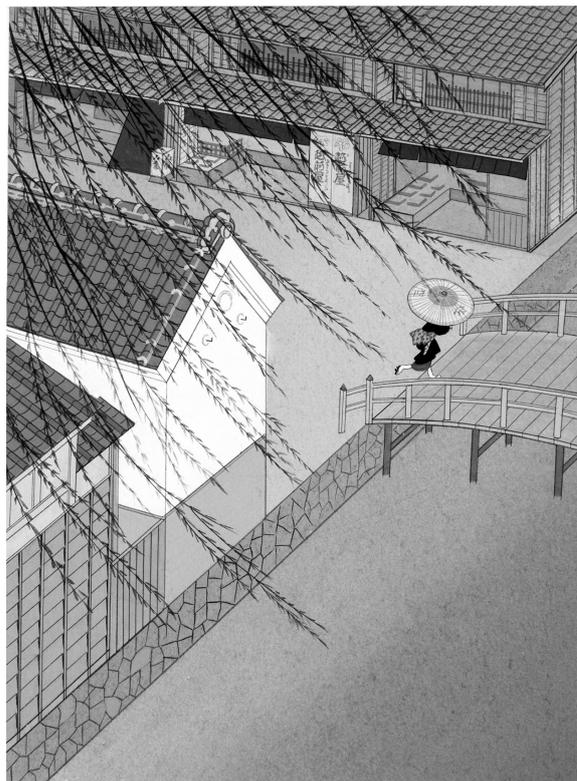
正太郎の三大人気シリーズである『鬼平犯科帳』『剣客商売』『仕掛人・藤枝梅安』などに、深川が多く登場します。「深川・千鳥橋」「寒月六間堀」「深川十萬坪」など深川をタイトルにした作品も多くあります。『剣客商売』『悪い虫』には、富岡八幡宮、さらに深川名物の鰻を扱う辻売りの鰻売り・又六が、ごろつきの兄を改心させる場として、洲崎弁天社が描かれています。また『鬼平犯科帳』の主人公・火付盗賊改・長谷川平蔵は、正太郎が小説に描いたことで歴史の表舞台に立った代表的な人物といえます。若い頃は「本所の鍔」と呼ばれる遊び人で、本所深川を巡りました。史実の平蔵は天明7年(1787)42歳で火付盗賊改となり、菊川の住居兼役宅に住みました。当時の江戸の社会問題だった、地方から江戸に集まる無宿者の授産施設である「人足寄場」の設立は、他の地域にも同様の施設が広がるなど歴史上に大きな功績を残しました。

3. 藤沢周平

～深川の町を縦横に描く～

(1) 藤沢周平と深川

現在の山形県鶴岡市で生まれた藤沢周平《昭和2年(1927)～平成9年(1997)》は、生まれ故郷である山形の庄内藩をモデルにした架空の海坂藩を舞台にした『蟬しぐれ』などの武家ものの他に、主に江戸時代後期の江戸庶民の日常風景の中から、特に情感豊かに女性の姿を中心に人々の哀歓を描いた「市井物」を数多く生み出しました。周平は平成元年(1989)『深川江戸散歩』(新潮社)の取材で深川と当館を訪れ、次のように述べています。「私の小説に市井物という分野があって、よく深川を舞台にした物語を書く。もちろん、深川だけでなく、神田、下谷、浅草、本所といった(中略)あたりもよく書くけれども、小説に登場する頻度から言うと、やはり深川、現在の江東区が圧倒的に多いだろうと思う。」さらに、深川を最も多く取り上げる理由として「私を深川に惹きつけるひとつの風景は、その土地を縦横に走る掘割である。」と水の町・深川ならではの風景を挙げています。また、当館の常設展示室・江戸深川の町並みを見学し、「空間には江戸情緒がたっぷりと詰め込まれているのだった」「見ていて飽きない場所」と述べています。



新潮文庫『橋ものがたり』表紙装丁画 蓬田やすひろ画
画像提供 鶴岡市立藤沢周平記念館

(2) 周平が描いた深川

周平の作品が「武家もの」から「市井もの」へと転換するきっかけとなった作品が『橋ものがたり』です。橋は人々の出会いや運命を静かに見つめる象徴的な場として描かれています。万年橋での幸助とお蝶の幼馴染みの再会を綴る「約束」から『橋ものがたり』は始まります。また周平は錦絵からも多くのヒントを得て、歌川広重の『名所江戸百景』『大はしあたけの夕立』から小説を創作した「大はし夕立ち少女」では、少女から大人の女性に成長していく、さよの姿を描いています。

このように作家たちは深川を舞台にして、そこに生きる庶民の暮らしや深川の情緒を、今の私たちに臨場感豊かに伝えています。多くの人たちが行きかう町の光と影、さらに悲喜こもごもの思いがあふれる様々な場面が、生き生きと時代小説の中に息づいています。

(主な参考文献)

藤沢周平著・枝川公一ほか著「深川江戸散歩」
(新潮社/1991)

池波正太郎著「江戸切絵図散歩」(新潮社/1993)

竹添敦子著「山本周五郎庶民の空間」

(双文社出版/1997)

中島誠著「藤沢周平論」(講談社/1998)